

培養し、トリプシン-EDTA 処理または低温度処理により回収した細胞の細胞機能について比較したところ低温処理では正常部位のミクログリア細胞の諸機能が維持されていることが明らかになった。

15. 免疫吸着療法における白血球の変動

(神経内科) 太田宏平・清水優子・
植田美加・秋山尚子・岩田 誠

免疫疾患に対し血液浄化療法は臨床応用されているが、本法の一つである免疫吸着療法 (immunoadsorbent therapy: IAT) は血漿蛋白喪失が少なく、生体にかかる負担もより軽微であるため広く普及している。さらに IAT はケモカインの誘導や末梢血白血球数の変動を惹起するため、血漿蛋白吸着除去以外の機序でも免疫系を修飾している可能性がある。本研究では IAT 中の白血球 L-selectin (CD62L) と Mac-1 (CD11b) の変動と白血球動態との関連について検討した。IAT (血漿分離膜: プラズマフロー OP-05, 吸着カラ

ム: イムソーバ TR-350) を実施した 3 例の免疫性神経疾患を対象とした。経時的に末梢血白血球数測定と末梢血白血球 CD62L, CD11b の発現をフローサイトメトリーで測定した。単核球 CD62L と CD11b の発現は IAT 終了時に軽度の増加を示したが有意差は認めなかった。一方、好中球 CD62L の発現は IAT 施行とともに減少し、特に IAT 終了時に著明な減少を示した。また、好中球 CD11b の発現は IAT 施行とともに有意に増加した。末梢血白血球数は特に好中球の変動が目立ち、IAT 開始早期に一過性に減少したが、その後、反転上昇し、終了時には著明に増加した。IAT 中に見られた好中球 CD62L の減少と CD11b の増加は好中球活性化に伴う selectin shedding と CD11b の upregulation を反映すると考えられた。これら好中球膜上の接着分子の変動が末梢血白血球の動態に関連し、IAT は生体に対しより広範な影響を与えうることが示唆された。